

自己評価報告書(最終報告)

報告者

生活・健康系コース(技術・工業・情報)／林 秀彦

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

本年度の研究テーマは主に5つあり、研究成果の一部は国際会議にて発表する計画である。人間・脳情報に関する研究では、視線測定、脳機能測定、動作測定、心理物理実験などによって人間の情報受容や情報発生の特徴を明らかにし、UI、HCI等へ応用する研究を対象としている。情報教育・情報環境と学習支援に関する研究では、プログラミング教育、デジタル教材、モバイルメディア、電子黒板等の教育・学習の支援に関わるハードやソフトの研究開発を対象としている。情報処理に関する研究では、感性・知能情報などに関わる実験を通じた情報処理について、複数同時に入力される情報の処理を対象としている。知識科学に関する研究では、組織的知識創造に関する場の理論と実践を対象としている。立体認識と視覚や体性感覚に関する研究では、錯視、視覚シンボル、3次元映像、拡張現実感、アンビエントメディア等を対象としている。科研費申請に向けて考えているテーマは、これらの多岐に渡るテーマを精選して申請する計画である。

2. 点検・評価

本年度の研究テーマは主に5つあり、研究成果の一部は国際会議AAI2012にて研究発表することができたので予定通りであった。主な5つの研究テーマについては、人間・脳情報に関する研究では、視線測定によって電子書籍端末の特性を分析した研究を進めており、12月の研究会にて発表した。情報教育・情報環境と学習支援に関する研究では、プログラミング教育におけるソースコードの採点方法について研究しており、これも12月に研究発表した。情報処理に関する研究では、学習環境の音環境に着目した実験的研究を進めており、12月に発表した。知識科学に関する研究では、組織的知識創造に関する場の理論と実践を対象としており、創造性教育やリテラシー教育への応用について学外の共同研究者との打合せを進めた。立体認識と視覚や体性感覚に関する研究では、3D映像と突出感の関係性について、動作解析装置を活用した分析を進めており、9月の国際会議で研究発表した。科研費申請に向けて考えているテーマは、これらの多岐に渡るテーマを精選して2件に絞って申請を計画して、予定通りに申請を行った。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

これまでに共同で研究をしている大学の学生が本コースに入学している。またネットワークやウェブを通じて留学生も入学している。これらは、これまでの研究活動が共同研究をしている教員から学生に伝わることやネットワークやウェブを通じて伝わることの効果の一端を示していることから、今後もそれらの取組みを継続する。

2. 点検・評価

これまでに共同で研究をしている大学の学生が本コースに入学していることから、本年度も同様に共同研究している教員から本学を希望する学生を紹介いただけるように連絡をとった。学部4年生については希望者がいなかったが、学部3年生では検討している学生もいるようであるので継続的な取組みが必要である。また、学内では、国際会議への論文投稿も行った優秀な学生が進学につながった。また、そのほかにメールを通じて専門の研究について連絡を取り、大学院に入学した学生もあり、予定以上の取組ができた。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

本年度は、学部1年生のクラス担当教員になった。また、これまで研究生であった学生が二人とも大学院生(留学生・修士課程)になった。また、博士課程の大学院生に対しては、学生参加プロジェクトを担当することになった。これらのことから、学部生、大学院生への教育・学生生活のあらゆる支援をする。

2. 点検・評価

本年度は、学部1年生のクラス担当教員になったこともあり、これまでよりも学生との直接的な関わりが増えた。同好会の顧問についての依頼があり対応したのも、その1つである。また大学院生については、学生の初めての国際会議発表に向けて時間をかけて取組むことができた。博士課程の学生については、学生参加プロジェクトを進めており、11月の4大学合同研究会にむけて準備し、また3月に報告書を提出することができた。このように、それぞれのフェーズであらゆる支援を進めることができた。

II-2. 研究

1. 目標・計画

本年度は、知識創造と情報技術をテーマとした国際会議をオーガナイズし、これまでの研究成果の一部を公表する計画である。またI-1の目標・計画に記載の通り、多岐に渡る研究を実施していくとともに精選して科学研究費申請も行う計画である。

2. 点検・評価

本年度は、知識創造と情報技術をテーマとした国際会議をオーガナイズし、これまでの研究成果の一部を公表できた。またI-1の目標・計画に記載の通り、多岐に渡る研究を実施していくとともに精選して科学研究費申請も行った。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

大学運営においては情報の基盤を支える情報基盤センターの果たす役割を認識し、業務が効果的に進められるように、しっかりサポートすることで、間接的に本学の運営に貢献する。また、クラス担当教員、大学院教務委員等の業務も円滑に進めていきたい。

2. 点検・評価

大学運営においては情報の基盤を支える情報基盤センターの果たす役割を認識し、業務が効果的に進められるように、しっかりサポートすることで、間接的に本学の運営に貢献している。とくに今年度は次期システムの検討やソフトウェアの導入を担当しており、ソフトウェアは年内に納品され、予定通りに進んだ。次期システムについての検討も協力して進めている。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- ①附属学校園の情報環境サポートをセンタースタッフと協力することで連携を深める。(附属学校)
- ②大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行い、社会に貢献する。(社会連携)
- ③留学生(研究生)の指導や交流、そして国際会議を通して実践的な国際交流を図る。(国際交流)

2. 点検・評価

- ・附属学校園の情報環境サポートをセンタースタッフと協力することで連携を深めた。(附属学校)
- ・大学と地域・社会との交流・連携を積極的に行った。(社会連携)
- ・留学生(研究生)の指導や交流を通して実践的な国際交流を図った。(国際交流)

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)